

HAMAGUCHI YOZO MINAMI KEIKO

浜口陽三 南桂子 展

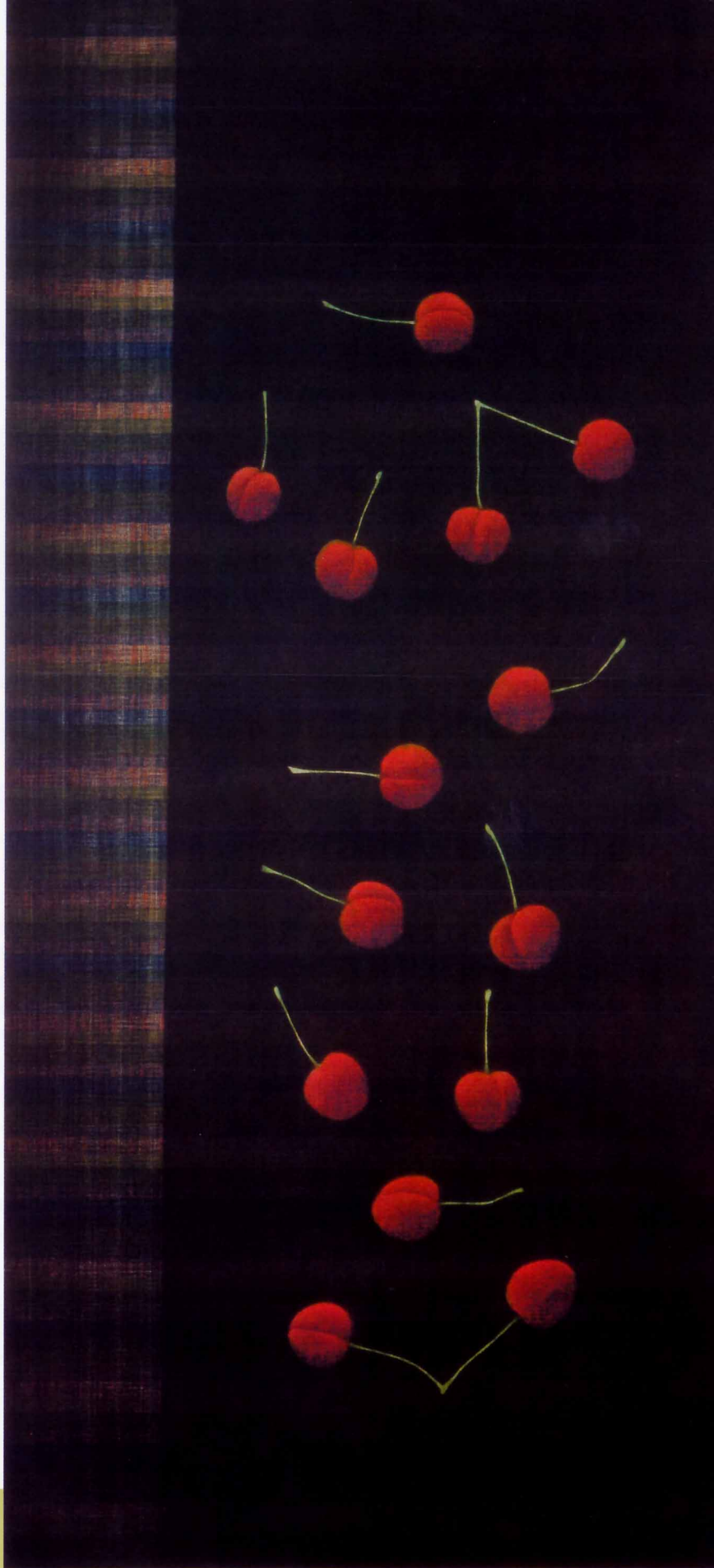
—色彩銅版画の魅惑—

2010. 2. 2 TUE - 3. 30 TUE

開館時間=9:30~17:30(入館は17:00まで)《会期中無休》



《マロエと少女》1975年 南桂子



《14のさくらんぼ》1966年 浜口陽三

入館料=一般1,000円(4枚セット券3,000円)／大学生800円／高校生500円／中学生以下無料

後援=NHK津放送局、三重テレビ放送、中日新聞社、読売新聞社、伊勢新聞社 特別協力=ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクション

当館学芸員による列品解説=2月7日(日)、3月7日(日) 14:00より

 **paramitamuseum** 財団法人岡田文化財団
〒510-1245 三重県三重郡菟野町大羽根園松ヶ枝町21-6 Tel.059-391-1088 Fax.059-391-1077
<http://www.paramitamuseum.com> E-mail:office@paramitamuseum.com MAPCODE 566359095

交通機関

■お車をご利用の場合=東名阪四日市ICで降りて国道477号(湯の山街道)を湯の山方面へ約6.5km
無料駐車場あり(普通車100台、大型バス駐車可)

■電車をご利用の場合=近鉄「四日市駅」下車、近鉄湯の山線に乗り換え約25分「大羽根園駅」下車、西へ300m
全館バリアフリー、車椅子常備

浜口陽三 南桂子 展

—色彩銅版画の魅惑—

2010. 2. 2 TUE - 3. 30 TUE



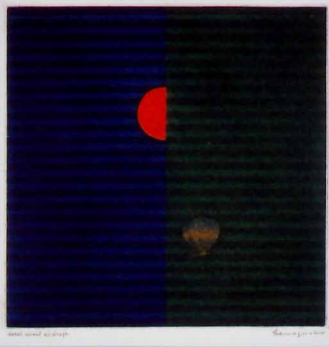
《しだの中の鳥》1975年 南桂子



《3本のモミの木》1958年 南桂子



《パトリックのさくらんぼ》1980年 浜口陽三



《蝶と太陽》1969年 浜口陽三



《西瓜》1981年 浜口陽三



《ジプシー》1954年 浜口陽三

浜口陽三 略年譜

- 1909(明治42)年 和歌山県に生まれる。生家は千葉県銚子で200年以上代々醤油醸造業を営む。
- 1928(昭和3)年 東京美術学校(現東京藝術大学)彫刻科に入学。
- 1930(昭和5)年 東京美術学校を退学。梅原龍三郎氏のアドバイスで、パリに留学。
- 1940(昭和15)年 第二次世界大戦のためフランスより帰国('53年フランスに戻る)。
- 1954(昭和29)年 第1回現代日本美術展(日本)佳作賞受賞。サロン・ドートンヌ(フランス)会員となる。
- 1957(昭和32)年 第1回東京国際版画ビエンナーレ(日本)東京国立近代美術館賞受賞。第4回サンパウロ・ビエンナーレ(ブラジル)国際版画部最高賞受賞。
- 1958(昭和33)年 第5回ルガノ国際版画ビエンナーレ(スイス)9人賞受賞。第9回毎日美術賞特別賞受賞。
- 1961(昭和36)年 第4回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ(ユーゴスラビア)グランプリ及びVjesnik新聞賞受賞。
- 1963(昭和38)年 フィレンツェ素描アカデミア(イタリア)名誉会員推挙。
- 1966(昭和41)年 第1回クラコフ国際版画ビエンナーレ展(ポーランド)グランプリ同等賞受賞。第4回('72)にも同賞を受賞。
- 1981(昭和56)年 昭和56年度和歌山県文化賞受賞。
- 1982(昭和57)年 北カリフォルニア版画大賞展(アメリカ)グランプリ受賞。
- 1986(昭和61)年 ベルギー王立アカデミー美術部門名誉会員となる(ベルギー)。勲三等旭日中綬章受章(日本)。
- 1994(平成6)年 第7回ノーザン・ナショナル・アート・コンペティション(アメリカ)Fern and Gail Stefanik賞受賞。大阪トリエンナーレ1994-版画(日本)朝日放送賞受賞。
- 1996(平成8)年 帰国。
- 2000(平成12)年 東京にて歿。

南桂子 略年譜

- 1911(明治44)年 富山県に生まれる。
- 1945(昭和20)年 東京に出て壺井栄に師事し、童話を学ぶ。
- 1949(昭和24)年 浜口陽三と出会う。
- 1954(昭和29)年 浜口陽三とともに渡仏。フリードリッヒに銅版画を学ぶ。
- 1955(昭和30)年 独立美術家協会展(フランス)。サロン・ドートンヌ(フランス)。フランス文部省に作品買い上げ。
- 1957(昭和32)年 第1回東京国際版画ビエンナーレ(日本)。以降第5回まで出品。第2回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ(ユーゴスラビア)。以降第3、6回に出品。
- 1958(昭和33)年 ユニセフのグリーティングカードに作品が採用される。以後カレンダー('66)、子供教育用スライド('68)にも採用される。
- 1982(昭和57)年 第50回記念日本版画協会展(日本)。
- 1983(昭和58)年 日本版画協会名誉会員に推挙される。
- 1996(平成8)年 帰国。
- 2004(平成16)年 東京にて歿。

浜口陽三 (1909-2000)は生涯の大半をフランスで過ごし、独自の色彩銅版画を開発して世界的に活躍しました。

浜口の作り出した色彩銅版画はカラー・メゾチントと呼ばれ、漆黒の画面の中に自ら光を放つような鮮やかな色彩に彩られた静物が浮かび上がるというものです。

メゾチントの技法自体は17世紀中頃から西洋銅版画に用いられてきたもので、一旦銅板の全面を均一に荒らして漆黒の画面を作った後、自分の描きたいものを金属のへらで磨きだして、白く浮かび上がらせるというもので、磨き方の度合いによって、微妙な濃淡の諧調を表現することができます。ちょうど全体を鉛筆で黒く塗りつぶした画面に、消しゴムで絵を描く感覚に似ているといえましょう。しかし、この技法は当の西洋においても写真術の発達によりほとんど使われることがなくなっていました。浜口は埋もれていた古い技法を復興させ、自らの創意による新しい展開を示したのです。エッチングに代表されるほとんどの銅版画は線による表現ですが、その中においてメゾチントは面による表現を可能にします。浜口はその無彩色の画面に色彩を加えることによって、黒の中に浮かび上がる色彩の鮮やかさを強調すると同時に、対比される漆黒の画面の瞑想的な美しさを引き出しています。

南桂子 (1911-2004)は浜口陽三の生涯の伴侶としてともにフランスに渡り、自らも色彩銅版画の制作を行いました。

浜口の色彩がメゾチントによる面の表現だとすると、南の作品はエッチングによる線の表現が主となりその線画に色彩を加えています。また独特のモチーフは少女、花木、鳥などを用いて詩情あふれる世界を作りあげています。

今回はミュージアム浜口陽三・ヤマサコレクションの全面的なご協力をいただき、最初期の作品から晩年にいたる60点以上の作品に伴侶南桂子の作品を加え、浜口陽三・南桂子夫妻の残した足跡をたどりまします。

写真家・土門拳 没後20年記念 企画展 土門拳の見た日本人

2010年 4月1日(土)～5月30日(日)

「しんご 浅草1954」 ©土門拳記念館



日本の写真界に大きな足跡を残した土門拳の没後20年を迎え、土門の捉えた日本人の原点を人物作品を中心に展示します。報道写真家を志した初期から、車椅子の使用を余儀なくされた晩年までを網羅して、写真家・土門拳の優れた人間洞察をふり返ります。

交通機関

- お車をご利用の場合 東名阪四日市I.C.で降りて国道477号(湯の山街道)を湯の山方面へ約6.5km 無料駐車場あり(普通車100台、大型バス駐車可)
- 電車をご利用の場合 近鉄「四日市駅」下車、近鉄湯の山線に乗り換え約25分「大羽根園駅」下車、西へ300m 全館バリアフリー、車椅子常備

paramitamuseum 財団法人岡田文化財団

〒510-1245 三重県三重郡菟野町大羽根園松ヶ枝町21-6 Tel.059-391-1088 Fax.059-391-1077
http://www.paramitamuseum.com E-mail:office@paramitamuseum.com

